



て通る 加「ヤア澁川、暫らく何を考へ込んで居る 伴「オ、竹内……オヤ、石川岸柳殿、寺西閑心殿も同道で……、サアズツと此方へ……、石「澁川、何うも氣の毒じや、蟠龍軒殿の葬送には會葬をしたが、御身は奥羽漫遊中と聞いて、之れを聞いたら定めし愁傷であらうと思つて居た 伴「イヤ、之れも天命、己を得ぬ次第で…… 寺「ヤツ澁川、誠に察する、就ては我々三人、一臂の力を添へたいと思つて歩つて来た 伴「ナニ、一臂の力とは…… 加「オ、澁川、自分一人で美味い汁を吸つては不可んよ、チト我々にも相伴させてくれ、此の石川が今朝駿河臺の大久保老体のお屋敷へ伺つた、處が秘密で斯様くとのお話しがあつたとの事、幸い乃公は奥羽漫遊より歸り、今石川の道場で足を留めて居る、折柄寺西も來合して、三人同道して来た、秘密だから他の者は誰も知るまいが、我々三人は是非米澤へ同道して、城の四角に手をかけて、四人がヨツシくと擔いて歸る積りだ、黙つ



て行つては不可んぞ、此の事を頼んで置きたい爲め、早く來る、ツヤア仕度もあらう、邪魔になると氣の毒だ、歸るよ……」三人はアイと歸る 伴「オヤ、困るな何うも、秘密くと云つて誰にも彼にも話されては堪らぬ 太「アハ、ハ、大分面白くなつて来た、イヨ、十五方石の城攻めだ……」太助一人が躍り上つて居る。

●十萬億土迄酒を飲みに行くのは……

豪傑澁川伴五郎も、加勢が續々出て來るので、却つて有難迷惑をして居る 伴「太助、困るじやないか、秘密で誰にも彼にも話されては……未だ何人來るか分らん…… 太「宜いじやアございませんか、一人でも多い方が賑か…… 伴「貴様ば、左様な事を云ふが乃公は困る、今度誰でも來たら居ないと云へ…… 太「へエ、私は何うも人に嘘を吐くのは嫌いな性分……、エ、

宜うございます、シヤア左様云つて追つ返しませう」云つて居ると、又玄關で案内の聲がする、太助飛び出して見ると、大兵肥満の立派な武士が立つて居る。太「へい、入らつしやいませ。武「取次御苦勞、瀬川殿は御在宅か太「へエ、夫れが其の居るとも居へとも分りませんので……武「ナニ、居るとも居ないとも分らん……曖昧な事を申す、隠すと爲にならぬぞ……太「ケド、ソレが何うも……」太助モシ／＼して居ると、件の武士はズイと玄關に上り、猿臂を延して、太助の首筋をチヨイと掴み、グイと宙に提げた。武「サア何うだ、有体に申せツ、居るとも居ないと分らんとは怪しからん口上、武士を欺くと捨り潰すぞ……」怒鳴り立てる、太助は提げられたが、之れ位いで呟ふやうな男でない。太「オヤツ此ン畜生ツ、巫山戯た事をしヤアがる、瀬川道場の一の子分の一心太助さんだ、左様な事で怯々するんじやアねへや、サア何うでもしろ、乃公は頼まれた事は口が裂けても云はねへ性分だ、宜い氣持だ

アラ／＼と垣根の絲瓜のやうだ、程が宜いだらう、人が來たら居ないと云へと云いつかつた以上は、假令身体が粉になつても云ふんじやアねへや……」云はないと云つて皆な云つて居る、奥で瀬川伴五郎、之れを聞いて我れ知らず、ドシ／＼飛び出し、ヒヨイと武士の顔打ち眺め。件「イヨ、荒木氏ではござらぬか。又「ハア、い、瀬川御身も人が悪い、此の荒木又衛門吉村に玄關拂いを喰はさうとは餘り酷い身共は蟠龍軒殿とは無二の朋友、二三度當家へも伺つたが、御身とは年輩が違ふから、未だ交際はして居ないが、蟠龍軒殿の横死については、大いに失望をして居る、處が只今途中で關口彌太郎に會つた、秘密だが實は斯様／＼と承はり、其奴は愉快だ、蟠龍軒殿の尊靈に對しても知らぬ振りはして居れん一番乗り込んで采配を振つて見たいと云ふ考へ、御身が許す許さんは勝手だ、又右衛門一つ蟠龍軒殿の位牌に願つて見たい所存、失禮だが佛間へ案内頼む」太助をドンと投げ出し、ズン／＼と奥

へ通り、佛間へ歩つて来て、ヒタと座り込み兩手を支いて 又「ヤア蟠龍軒殿、無念であらう、御察し申す、身共と御身は同じ時に道場を開いて、門弟は一人も来ないで、毎日酒ばかり呑んで居た飲友達だ、然るに御身は今回不慮の最後、荒木又右衛門吉村、實に遺憾千万に存じて居る、就ては子息伴五郎殿も斯様くであるが、此の荒木を米澤へ同伴の義お許し下さるであらうか……、ム、ナニ……伴五郎が假令何と申さうとも許す……、夫れば千万、忝ない……ナニ……悴は血氣に逸つて困るから万事指圖を願ふ……成程御最も、シヤア又右衛門、御身に成り代つて采配を取らう……、左様に禮には及ばぬ、シヤア之れで失禮……、迷はず成佛して……、ナニ冥途へ歸る……、ナト酒を飲みに来い、何うも十万億土迄酒を飲みに行くのは餘り遠いから夫れだけは御免蒙むる、オヤ／＼早や行つて仕舞つた……、ア、ア懐かしい事だ」又右衛門自問自答、暫らく差し俯向いて居たが、ノソ／＼次の間に出て来て 又「

ヤア邊川、蟠龍軒殿の許しを得た、今聞く通りだ、ナカ／＼蟠龍軒殿は足が達者、十万億土から出て来て、又歸つた、何れ明朝は早く参る事にしやう、失禮御免……」アいと立ち歸る、跡に伴五郎呆れ返つて、伴「オヤ／＼、荒木又右衛門迄が来るとは驚いた、此の向であつたら、未だ何人来るか分らない、明朝は早く出立せなければ、五月蠅くつて仕様がなない」其の夜は寢んで夜が明ける、伴五郎は太助を促し立て 伴「サア早くしろ、皆が来ては面倒だ、出し抜いてやらう、眞逆米澤迄追つかけては来ないであらう」朝飯を急いで済し、身仕度して居ると、ドヤ／＼と入り込んで来たのか、眞先に荒木又右衛門吉村、續いて石川群刀齋岸柳、寺西彌左衛門閑心、關口彌太郎氏春、水戸の豪傑、朝比奈彌太郎、竹内加賀之助、紀州の豪傑、關口八郎、尾州の豪傑、星野勘左衛門の八人が歩つて来たから、流石の邊川、伴五郎開いた口が塞がらない、伴「オヤ／＼、朝比奈彌太郎、關口八郎、星野勘左衛門迄が聞き

つけて来た、何うも有難迷惑だ……又「オイ、何を妙な顔して居る、サア行かう……」八人は瀬川伴五郎を急ぎ立て、太助と共に十人連れ、何れも深編笠に面部を包み、ノシノシ出羽の米澤城下へ乗り込んで来る。

●九勇士相手に一泡吹かしてくれん

米澤城下の大徳寺と云ふ寺の本堂を借り受けた九人の豪傑は、荒木又右衛門を軍師役として、種々協議をする、氣早の關口彌太郎、朝比奈彌太郎、竹内加賀之助、關口八郎等は、短兵急に米澤城へ乗り込むべしと主張する、寺西閑心、石川岸柳、星野勘左衛門等は、一先づ形勢を探るべしと、穩な説を立てる、荒木又右衛門も其の説に同意して、一心太助に命じ、又「貴様一つ、直江刑部の屋敷を探ってくれ、刑部が果して屋敷に居るか何うか、熊谷權十郎は何處に居るか、密に詮議をしてくれ、太「へい、合點でございます」太助は

飛び出し、城下の屋敷町へ歩つて来ると、何んしる城代家老だから、直江刑部の屋敷は直に分つた、手を盡して調べて見ると、刑部は城内に起臥して、近頃は屋敷へ歸らないさうでございます、又「フ、ム、大抵城内に起臥して、近頃は屋敷へ歸らないさうでございます、枕を高く寝る事は左様な事であらうと思つて居た、奴等も疵持つ足だから、枕を高く寝る事は出来ない、此の上は直江山城守が宇佐美甲斐守に願つて見やう」と、相談を決して、瀬川伴五郎はノシノシ宇佐美甲斐守の屋敷へ出掛け面會を願つたが留守だと云つて會つてくれない、伴「フ、ム、事によると我々が乗り込んだ事を嗅ぎつけて、不在を使ふのかも知れない」と、斯う思つたから、伴五郎は支關に上り込んで動かない、伴「主人に會はないうちは、歸る譯に行かん、太助辨當の用意して持て来い、夜に入つたら蒲團を運んで来い、太「へい、宜うご



「さいます、サア根比へたく……」太助は正午になると辨當を取りに走る。晩飯は正午飯と一處に持つて来る、夜に入ると蒲團を運び込む、玄關へ大の字になつて寝る、宇佐美の家來は喧ましい掛合つたが、伴五郎頑として應じない愚圖々々云ふと擲んで投げる、太助が尻馬に乗つて怒鳴り出す。太「コオ、手前等は乃公等を誰たと思つて居やアがる、憚りながら腰押には天下の直參大久保のお殿様控へて居るんだ、可笑しな眞似をして居やアがると、爲にならねへぞツ」直に大久保彦左衛門を引合ひに出して威張る、之では如何な宇佐美かひのかみ隠れる譯に行かぬ、遊々伴五郎に對面する事になつた。件「アイヤ實は斯様々々、直江刑部と熊谷權十郎が我が父を手にかけた確な證據がござる、是非共兩人を引渡して頂きたい。甲「成程、御説を聞けば無理がござらぬ話であるが、苟も城代家老を勤める直江刑部、輕々に引渡す譯には相成らん、一應江戸表の主君に伺つた上、何分の返答に及ぶであらう」之れも



尤な返事であるから、伴五郎も否とは云へない、然らばと云つて一應引取り其の沙汰を待つ事になつた、伴五郎は立ち歸つて、此の事を一同に話し、返事の來る迄待つ事にした、十人は退屈だが仕様がな、毎日碁を圍む、角力をやる、酒を飲む五日ばかり、待つたか何の沙汰もない、夫れはサテ置き、上杉家に於ては、既に遊川伴五郎等が米澤城下へ乗り込んだ事は、江戸表よりの注進によつてチャンと分つて居る、殊に千坂兵部は、最初は遊川蟠龍軒を召抱へると云ふ發頭人であつたが、城代家老直江刑部が反對を唱へ、熊谷權十郎に命じて、蟠龍軒を殺させたについて、遊川伴五郎等九勇士が米澤に乗り込んだと聞くより、却つて意地となり、此の上は十勇士を相手に一泡吹かせてくれんと、反抗心を起して、江戸より米澤に早打を立てる、米澤城内では老臣共大評定を開き、種々協議の末、宇「兎に角、遊川初め荒木等の豪傑が乗り込んだ以上は、一筋縄では歸るまい、江戸の千坂より申し來りし

通り、直江刑部、熊谷權十郎の身代りを拵へ、十人に引渡すが宜からう、只今刑部殿、まつた熊谷の口振りによれば、十人の中で誰も顔を知つたものはないと云ふからには、贖者とは氣付くまい、江戸へ引立て歸り、ヨシヤ發覺した處で、千阪兵部が引受けると云つて居るについては、何か手段があるに違いない、斯うなつたら意地である、十五萬石の上杉家を相手にしやうなぞとは生意氣千萬、飽迄も引渡しては當家の耻辱である、各々の意見は何うであらう」と、述べ立てる、何んしろ宇佐美甲斐守の意見、且つは千阪兵部よりの知らせであるから、一同に於いて異議のある筈はない宇佐美甲斐守の意見は直ちに用いられ、身代りを拵へて、夫れを引渡すと云ふ事になつた、大徳寺に居る九勇士は、早や七日目となつたから、更に音沙汰ないから、澁川伴五郎は氣を焦ち、ドシ／＼宇佐美屋敷へ怒鳴り込むと、甲斐守は面會して、甲「遅くなつて氣の毒である、明朝兩人を引渡すによつて、城外大手先に

待たれたし、其の評議の爲め、斯く遷延いたした次第である」と、返答した、伴五郎は大いに喜び、身代りを拵まされるとは知らないから、勇んで大徳寺へ立ち歸つた、其の夜は一同酒宴を催し、又「ヨク、上杉家にオメ／＼と引渡すものだ、誰か刑部と權十郎の顔を知つて居るものはないか……彌「イヤ、乃公は一向知らん、八「乃公も知らん……」知らん／＼と云ふ者ばかり、又右衛門は思慮深き人物であるから、又「夫では困る、上杉家ともあらうものが幾等悪人にして、城代家老だ、首にして引渡すなら兎に角生きたまゝ、容易く渡すとは不思議、我々が上杉家の家來であつたら斷じて渡さぬ、オメ／＼兩人を渡すと云ふは此の上もなき耻辱である、乃公は今迄或は詰腹切らせて、首を渡すかも知れんと思つて居たが、本人を渡すと云ふは何うも合點が行かぬダカラ萬一贖者を擱ますのではないかと考へるのだ、兩人の顔を誰も知つて居ないとは扱つた、夫じやア身代りの奴を擱まされても分らない、若し左様な

ものを江戸へ連れ歸つては、世間の物笑い、我々の耻辱になるばかりだ」と
流石は荒木又右衛門、早くも其處に目をつけた。

●太助大明神様だ

九人の豪傑も之には弱つた。伴「失策つた、荒木氏の云ふ通り、直江刑部と熊
谷權十郎の顔見知りの者を連れて來なかつたのは、一生の不覚だ、成程夫で
は贖者を擱まされても分らない、オヤ／＼贖者を連れて歸つては、我々の面目
に關はる、何うしたら宜いだらう、餘り逸まり過ぎて、飛んだ抜かつた事をし
た……と云つて之から江戸に歸り、兩人の顔を見知つて居るものを連れて來る
と云つても、客易の業ではない、序でに此の土地で誰かを頼んで見ては何うで
あらう。又ウム、乃公も其の事を考へて居るのだ、シヤア至急探して見や
う」と、寺の和尚に相談したが、和尚は後難を恐れて、和「愚僧も、近頃當

寺の住職となつたばかりで、お二人の顔は更に存じません」と、云つて遁れ
る夫れも、無理のない話し、上杉家の重役に反抗しては、領分地に住んで居る
事が出来ない、幾等金儲けになつても餘計な事はしないが宜いと、誰も彼も恐
れて應ずるものがない、威しつけると顔を知らぬと云ひ出して始末に不可ない
九人の豪傑も途方に暮れた、處が今迄酔拂つて寢て居た一心太助は、大欠
伸と共に目を覺し、シロ／＼九人の顔を眺め、太「オヤツ、貴公方は風托らし
い顔をして居られますが、一体何うなさつたんです。伴「太助、大變な事が出
來たのだ、マア之れへ來い、實は斯様々々だ、誰も二人の顔を知つて居るもの
がない、和尚に話したが、遁辭を搦へて逃げる、夫れも無理もない、後難を
恐れて居るのだ、貴様はヨク智恵を出す男だが、何か贖者が眞物かを見極め
る方法はないか……、方法と云つても別に手段はない、ウンと金を擱まして、
二人を見知りの男を雇つて來てくれぬか」之れを聞いて太助は手を振り太「



不可ません、金を掴ましたつて駄目です、金を貰つて之れが直江刑部に熊谷権十郎だと云へば夫れ迄でせう、後で違つたから金を戻せと云つたつて仕様がございませぬ、領分地に居る奴が、其の國の重役や領主のする事に背いたら、バツサリ首が飛びますから、眞實を云ふ氣遣いがれへでせう 伴「ウ成程、其處もある 太「其處もあるじやアねへ、夫れに違ひございませぬ、處で此の一心太助の居る間は御安心なさいませ、斯んな役目ばありはしないかと貴公のお供をして來て居るんです 伴「ナニ、夫では貫様顔を知つて居るのか 太「へい、直江刑部と云ふ野郎は、城代家老ですから、一向見た事アありませんが熊谷権十郎は二三度見ました、私は魚屋ですから、お大名のお屋敷は大抵出入りいたします、上杉家のお上屋敷もお愛顧先なんですから、何日か出掛けた時に、熊谷権十郎の顔を見ました、權十郎さへ檢分しましたら分るでせう、權十郎が賢者であつたら、刑部の野郎も掴まし者に違ひねへのです、熊谷が眞



物であつたら、刑部も眞物に極つてまさア、ねへ荒木の旦那…… 又「フム左様だ、其の理屈はある、シテ貴様確に熊谷を存知て居るのだな 太「大丈夫でございませぬ、知り抜の法印でございませぬ……」一同之れを聞いて蘇生の思ひ、何れも満面に笑を含み 伴「明日は、太助大明神様だ、頼むぞツ」太「エツへ……、明日だけが太助大明神様ですか、ナア心配なさるにやア及びませぬ、一心太助が居る以上は、大船に乗つたやうに思つて居らつしやいませ」太助は一人得意の鼻を蠢かして居る。

● 賢者を掴まさんとは無禮千萬

力山を抜く九人の豪傑も、太助の爲に勵まされて俄に勇み立つた、一旦白けて居た酒宴は、忽ち興湧き踊る跳るの大騒ぎ、酔つ拂つて正体もなく寢込んだ十人は、翌朝早くより目覺し、食事を済し身仕度をして、豫て約束

の場處なる米澤城大手馬場先へ乗り込んで来た、萬一を警戒して九人の勇士は、武者草鞋に身輕の扮装、澁川伴五郎を先に立て、一心太助を見届役としてドシ／＼歩つて来る、聽て定めの時刻となつた、城内の潜門を開き、上杉家の若武士十五六名は、二名の細付を引立て、現はれ、九人の待ち受けたる場處に近寄つて来る、頭立つたる一人はアイと前に進み、武「アイヤ、御苦勞千萬に存する、御約束により直江刑部、熊谷權十郎の兩名を引渡し申さん、ヨク檢分して受け取られよ」澁川伴五郎は進み出で、伴「某澁川伴五郎と申す、兩名は確に受け取る、太助參れッ」聲に應じて一心太助は、バリ其の場に現はれた、兩名をシロ／＼眺めて居たが、太「不可れへ／＼、熊谷權十郎と云ふ野郎は何れだ、武「セ、拙者、熊谷權十郎で……太「へ、ン、其の手は喰はれへぞ、上杉家に同姓同名の熊谷權十郎と云ふ奴が二人ありやア知らねへこと、乃公が江戸のお上屋敷で見た熊谷權十郎とは、似

ても似つかぬ眞赤な贋者だ、旦那方推量に違はず、此奴は二人共喰はせ者なんで、御油斷なさいますなッ」云ふと等しく上杉家の若武士は動搖めき渡つた、武「之れは怪しからん、確に直江刑部と、熊谷權十郎を引渡すに贋者とは以ての外……太「何に言つてやアがるんだい、一心太助の二の目は銀紙じやアねへよ、一度睨んだら狂いつこはねへのだ」此の時澁川伴五郎は兩眼赫と怒らし、伴「エッ、贋者を掴まさんとは無禮千萬、此の上は容赦はならぬッ」叫ぶ等しく、一刀抜き打ちに、エイッ、贋權十郎の首は飛んだ若「ヤ、ッ、狼藉者ッ、伴「黙れッ、何が狼藉だッ、此の上は十五萬石を相手に城攻めに遭してくれる、覺悟しろッ」躍りかゝるも等しく、又もや贋刑部の首打ち落した、若武士はバラ／＼と城内に逃げ込み、門をピツシヤリ締め切つた、伴五郎首め八人の勇士は烈火の如く憤り、又「ヤア、我々天下の豪傑を欺かんとは生意氣千萬、假令上杉家でも容赦は出来ない、ソレ、城内へ乗

「り込めい」と、大音聲に呼ばつた、左様でなくつても荒れたくつて堪らない人間ばかりだ。彌「面白いく、斯うなつて来なくつちやア嘘だ、乃公に續けい」と、關口彌太郎は眞先に飛び出し、城門近く進みよる、此の時、瀧川伴五郎は大音聲、伴「ヤア、開門いたせ、手順を以つて願ひ出し我々に向ひ賢者か掴まし瞞着さんとは不埒至極、此の上は城内を家捜しなし、直江刑部と熊谷權十郎を引捕へてくれん、開門々々……」幾等怒鳴つても、城内は森として何の返答もない。又「エ、イ面倒だ、瀧川門を叩き破れツ。伴「オ、合點だツ」横手を見ると、目方五六十貫の大きい石が据へてある、之れ幸いと伴五郎はツカ／＼進み寄り、ウンと抱へて、目よりも高く差し上げ、門扉を望んで發止と投げる、バラ／＼／＼ガラ／＼／＼、烈しき物音と共に、サシも堅固の門扉も、門は折れ、扉は外れてパツタリ倒れた。又「ソレ、乗り込めツ……」十人は面も振らず、瀧川伴五郎を先に立て、ドシ／＼城内へ乗

り込み、今しも一の木戸を潜らんとする一利那、ヒヨイと正面を見ると、鐵砲構へた若武士百人餘り筒口揃へて入口に覗いをつけ、若「ヤア、狼藉者奴ツ、素浪人の分際として、十五萬石上杉家の城内を叩き破り、理不盡に亂入するとは何事だ、此の上は遠慮をせぬ、飛道具で撃ち取るが何うだツ……」之には天下の豪傑も立ち疎んだ、ズドンと遣られては夫れ切りだ、如何に豪勇の連中も飛道具には敵はない。伴「ウム……ヒ、卑怯な奴ツ……」伴五郎首め豪傑の面々、地團駄踏んで睨まへて居る折柄、バラリ躍り出た朝比奈彌太郎、關口八郎、星野勘左衛門の三人は、筒口の正面に突つ立ち、彌「サア打てツ、水戸の豪傑、朝比奈彌太郎を知らんかツ。八「紀州家の臣、關口八郎とは乃公の事だ。星「御三家の隨一尾張大納言義直、公の指南番星野勘左衛門とは我が事である、御三家の家來は陪臣にして陪臣にあらず、天下の直參、同然とは知らぬかツ、サア撃つて見ろ、十五萬石は只では濟まぬぞツ。彌「左様だ、

天下副將軍水戸の家來朝比奈彌太郎を撃つ積りか、上杉家と引代へなら、殺されても満更犬死でもあるまい、サア一思いに撃つて貰いたい」と、三人が筒口の正面に人垣を作つたから堪らない、流石の鐵砲組も、ハツと驚き、
 △「オヤ／＼、巧い考へをして居やがる、ウーン、之では撃つ事も出来ない……」と、今度は鐵砲組が立ち疎みの体だ、夫れと見た荒木又右衛門、瀧川伴五郎、竹内加賀之助、關口彌太郎、寺西閑心、石川岸柳の六人は構合より飛鳥の如く、鐵砲組の背後に廻り、又「エ、イ、此の野郎……」首筋擱んで左右に投げる、太助は何處から持ち出したか二間ばかりの丸太棒を振り廻し、太「此ン畜生ツ、一心太助を知らねへかツ」ビュー／＼振り立てる、鐵砲組は俄に躍ぎ立ち、パン／＼と火蓋を切る。

彦左忠教賄賂は至つて好物

米澤城内は上を下への大騒動となつた、天主閣の非常太鼓はドン／＼鳴り出す、彼方此方で急を報ずる法螺貝の音は、ア／＼／＼、城下の半鐘はツヤ／＼打ち出す、△「ソレツ、總登城の知らせだツ、出陣の法螺貝が鳴るぞ」と、或は馬上又は徒歩立ち、各自に得物を提げ、一家中の面々は、城内差して繰り込んで来る、九人の豪傑と一心太助は、最上此の上は破れかぶれと、取り捲く上杉勢を四角八面に斬り捲り、大荒れに荒れ出したが、衆寡素より敵すべからず、幾等九人が萬夫不當の豪傑でも、二千三千の上杉勢に取り捲かれては敵はない、軍師荒木又右衛門は咄嗟の間に思案を定め、又「これは大變な事になつた、之では肝心の直江州部、熊谷權十郎も手に入れる事は出来ぬ、此處で一人でも一命を落しては犬死だ、残念ながら引揚げるに限る、其の上で手段を廻すが得策である」と、覺悟を極めて聲高く、又「サア皆の者出乃に續けツ、此處は一先づ引揚げん……」と、眞先にドン／＼駆け出



す、素より一同も其の氣があるから、バラ／＼後に續いて、城内を飛び出し、大徳寺へ差して戻つて来たが、残念で堪らない。伴「此の上は、江戸へ引取り大久保彦左衛門殿を引張り出さんければ我々の手に合はない。又「左様だ／＼騒動好の大久保御老体を煽動で上げるより良策はない、サア出立々々……」

十人はパイと米澤を立ち退いて仕舞つた、上杉勢も追驅ける勇氣もない、四五十人死人怪我人は出来たが、マア／＼追拂つて結構だと、胸撫て下して居るのであつた、併し此の儘に打ち捨て置く譯に行かないから、直ちに江戸の千阪兵部に早打を立て一任一任を通知すると共に、城内には大評定を聞いて、善後策を協議して居る、此方九人の豪傑は夜を日についてドン／＼と江戸表に立ち歸り、九人は打ち揃つて大久保彦左衛門の屋敷に乗り込み、逐一申し述べた上、伴「何とか、御前のお力で直江刑部と熊谷權十郎を引渡すやう、御盡力を願いたいもので」と、纏りついた、彦左衛門待つて居たと云ふ顔付だ、



彦「アハ、い、九人が出掛けて暴れて来たか、併し天下に聞へし其方等が九人も揃つて居て、十五萬石の城を擔いで歸る事が出来ないとは意苦地のない話だ、乃公が一つエヘンと咳拂いしたら、十五萬石はメチャ／＼だ、ダが伴五郎何も上杉家を潰さなくつても宜い譯で、兩名さへ受取れば文句はないのであらう。伴「御意にございます。彦「夫なら、朝飯前の仕事だ、彦左忠教の方寸にある、心配すな、斯う云ふ事はチト大仰にやつて、一度上杉家を威かして置くのも後の爲に宜い譯だ、待て／＼、乃公が巧く芝居を打つてやらう、其方の名も出る、乃公もチヨイと金儲けをやらなくつては、此の節小遣錢に不自由をして困る、マア貴様等酒でも呑んで居れ、乃公はチヨイと上杉家の上屋敷へ出掛けて、威かして置かう……」彦左衛門横着な老爺だから、何を思ひついたか、馬に乗つてドン／＼上杉家の上屋敷に乗り込み、大守上杉公に對面の彦「ヤア、上杉侯には御壯健の体を拜し、彦左も喜ばしく存する。上」

イヨ一老人、ヨク参られた、シテ不意の入來、何事であるな……彦「他ではござらぬ、斯様々々の事件が出来たして居るか、御存知でございませうな……」素より上杉侯は御存知ない事、千阪兵部と國家老宇佐美甲斐守との許らいで遣つて居るのだ。上予は一向存知ぬが、或は千阪兵部の指圖ではあるまいか。彦「之れは怪しからん、假令千阪の計らいにしろ、此の重大事件を御存知ないとは迂遠極まる、不識庵謙信公以來の名家を介さうと起さうと、此の彦左忠教の考へ一つでござる、其の事を一寸申上げたたく罷り越した、イヤ永居は恐れ、御免……」彦左衛門夫れだけ云つて置いて、サツサと戻つて來る。彦「アハ、サア金儲けが出来た、貴様はドシノ酒を飲め、今に上杉家から賄賂を持つて來る、彦左忠教賄賂は到つて好物、其の代り云ふ事も聞かない、所謂取り切りで猫糞だ、之れが大久保一流の金儲けだ、サト貴様等も見習へ。伴「何うも、御前は酷い事をなさる、我々を手先に使つて金儲けと

は……彦「否なら廢せ、悪い方からドシノ金を絞り上げて、善い方へ使ふ兵法の奥義は此處にある、敵の糟で味方を肥やすと云ふのは、孫吳の兵法にもチヤンとあるぞ、彦左夫れを常に行つて居る、マア心配すな、細工は隆々だオホン仕揚げを見て居れ……」云つて居る處へ、上杉家の使者が來た、彦左衛門一室へ通して對面する、使者は何か口上を述べ、千兩箱を一つ置いて引取る、彦左衛門ニコ顔。彦「喜内、其の千兩箱を之れへ持て」喜内「は一同の酒宴の席へ千兩箱を運び込む。彦「アハ、何した昔の者、軍用金は此の通り出來た、彦左が一寸三角の目を光らすと直に之れだ、アハ、之れで米澤へ乗り込み、上杉家を苛めて、刑部と權十郎の兩人を貰い受ける、則ち敵の糟で我が身を肥やすやうなものだ、アハ、サト貴様等も大久保彦左を見習へ……」彦左衛門自慢の鼻を撫で、居る。

千兩箱が轉がつてるわい

上杉家の江戸家老千坂兵部は、大久保彦左衛門に千兩箱を一つ握らせて置いたから、最う心配ないと大安心、本國米澤へも此の事を知らせ、平氣で澄し返つて居る二三日経つと大久保彦左衛門は密に澁川伴五郎を招き彦五郎乃公は三日三夜考へて、巧い智恵を絞り出したぞ、一つ大袈裟に出掛けて、上杉家を威かし、兩名を受取り、華々しく其方に仇討をさせるの心底だ何うだ異存はあるまい、之れ迄大名の御前で仇討と云ふ事は度々あるが將軍家の御前で仇討と云ふ事は滅多にない、乃公が一つ骨を折て將軍家を引張り出す、スルト貴様の名前はパツと擴まつて、俄に豪くなる、何うだ巧い考へだらう 彦「はい、何分宜しくお願い申しませう 彦「イヤ禮は云ふな、乃公は貴様の爲に金儲けをしたのだ、千兩あればチヨイと小遣錢に不自由はし

ない、マア歸つて靜にして居れ、乃公は之より登城をして、將軍家の御機嫌を伺つて来る」彦五郎を歸した跡で彦「コリヤ喜内、馬の用意を申付ける、予は之より登城をするぞ」何んしろ勝手勤めの大久保彦左衛門、氣に向くと毎日でも登城する、氣に向かないと何日でも登城をしない、馬上で悠々と登城をして將軍家の目通りに出で、何言上して居る様子であつたが、下城の時はニコ／＼顔彦「アハ、ハ、ハ、最う大丈夫だ、將軍家のお許しを得たから、恐るゝ奴は一人もない、ダン／＼芝居が思惑通りになつて来るわい」大喜びで其の儘柳生飛彈守の屋敷へ出掛け、飛彈守宗冬に何が話し、木挽町を飛び出して、水戸家の小石川の館、市ヶ谷御門外の尾張家の上屋敷赤阪喰違いの紀州家の上屋敷、永田馬場の丹羽家の上屋敷を訪ね、一々何か申し述べて置いて、駿河臺に立ち歸り彦「ア、辛度、今日ほど働いた事はない、笹尾喜内は居らぬか、伴五郎を至急に呼びにやれ……、一心太助も呼



んで来い……」仲間は品川仁右衛門横町と、神田三河町へ飛び出した、間もなく澁川伴五郎と一心太助は歩つて来る。伴「御前、伴五郎参りました。太「お殿様、今日は……彦「オ、来たか、イヨ、芝居は近々に幕を開ける事になつた、来る十五日に、米澤へ乗り出すのだ、伴五郎、貴様は寺西、石川、竹内等に通知して、門人を残らず連れて、十五日の朝、品川海岸に勢揃をしろと云へ。伴「へエ、一体何うなりますので……彦「マア宜い、成べく大仰にしないと面白くない。太助、貴様は唐犬権兵衛、釣鐘彌左衛門、夢の市郎兵衛、揚巻助六懇意であらう。太「へイ、澁川の道場で度々出會います。彦「貴様之から行つて、十五日の朝子分を残らず引連れて、品川の海岸へ勢揃をしろと云つて来い、喧嘩仕度で来るのだと云へ……太「ウワ……面白、私も一つ神田魚河岸の若い奴を連れて参り申ませう。彦「ウム、左様しろ成べく賑やかな方が宜い。太助は飛び出す、伴五郎も夫々各道場へ通知する



彦「コリヤ喜内々々、旗本の加賀爪甚十郎、兼松又四郎、阿部四郎五郎、松平紋太郎、山中源内等に只今出掛けるやう云つて来い。喜「一体御前、何うなりますので。彦「黙つて見て居れ、彦左忠教、大芝居を打つて、興行元になるのだ、木戸銭なしで面白い芝居が見られるのだ。喜内は怪しみながら、夫々使者を立てる、旗本連中はドン／＼歩つて来る。加「老人、何事だい、彦「オ、甚十郎来たか、皆揃つたな、マア酒でも飲め、今日割前は取らん、乃公が奢るのだ安心して飲め……紋「オヤツ、妙だ、雨が降られば宜い……彦「何を吐す、彦左忠教は未だ今時の若い者には負けんぞ、金儲けにかけては少々、鐵面皮しいが、儲ける時はウンと儲ける、床の間を見ろ、千兩箱が轉がつてるわい。源「イヨ……之れは奇体だじやア遠慮なく飲まう、併し何用だ老人。彦「實は、斯様々々だ、十五日には旗本が勢揃いして、品川海岸に出て来い、時刻は朝だぞ……左様だなア、マア三百人位いで澤山だ、旗本八萬



騎を引ズリ出しては大變だ。又「面白い、大名相手の戦争とは近頃愉快だ……彦「コリヤ、戦争をしては満らない、威かすだけで宜いのだから、餘り亂暴をやるな。又「ヨシ、合點だ」旗本連中も承知をした、夫々十五日の朝を待ち受けて居る、大体仇討も澤山あつたが、一に富士、二に鷹の羽の喰い違い、三に上野で花ぞ咲かせると云つて、我が國の仇討は、曾我兄弟の富士の裾野、元祿四十七士の快擧、荒木又右衛門の伊賀の上野で三十六番斬此の三大仇討に留めを刺したのだが、之れ等は何れも辛苦艱難の上で仇討をしたから名が賣れて居る、氣樂に仇討をしたのは、夫れだけ珍重がられて居ない、澁川伴五郎の飛鳥山の大仇討なぞは、派手な事は此の上もなかつたが、夫れだけ難義をして討つたのでなかつたから、人が夫れだけ云はないのだ併し仇討としては天下に之れほど大袈裟な仇討はなかつたのである、仇討に辛苦艱難は附物であるか、澁川伴五郎は大久保彦左衛門と云ふ大立物が腰押

であつたから、造作なく父の仇討をする事が出来たのである。

●槍玉に揚げるから左様思へツ

イヨ／＼十五日の朝となつた、大久保彦左衛門は甲冑に身を固め、馬に跨り二間柄の槍を抱い込み、真先にドシ／＼品川海岸へ乗り出した、来て見ると早や澁川伴五郎は、身輕の扮装甲斐々々しく、荒木又右衛門、竹内加賀之助寺西閑心、石川岸柳等と、門人五百人を従へて待ち受けて居る。彦「イヨ、早や来て居るか。伴「御前にも、お早ふございます。彦「乃公は今度の芝居の興行元だ、早く来て居ないと都合が悪いから、出て来た、未だ千兩役者は見へんな……、ドレ暫らく休息して居やう」馬から降りて休んで居る處へ、向ふの方から馬蹄の響勇ましく、ドン／＼乗り込んで来た時、將軍家の指南番柳生飛彈守宗冬、之れ又甲冑に身を固め、陣太刀を横へ、高弟五



六人を従へ歩つて来る。彦「ヤア、飛騨殿御苦勞、檢分役は御身に限る」
 話して居る處へ、又もや乗り込んで来たは、旗本の無茶苦茶者、加賀爪甚十郎、兼松又四郎、松平紋太郎、阿部四郎五郎、山中源内等の連中、何れも馬上姿凛々しく、三百人の旗本を引連れ練り込む。彦「ヤア、御苦勞々々、オヤツ向ふから来るのは何處だ……」云つて居る處へ、眞先には朝比奈彌太郎、水戸の若武士百人を従へ、威勢よく驅けつける、續いて紀州の關口八郎、之れ又紀州家の若武士百人を連れて練り込み、其の後は尾張の豪傑星野勘左衛門、之れ又尾張の若武士百人を引率して乗り込んだ。彦「ヤア、御三家は揃つたな、御苦勞々々……」云つて居る處へ關口彌太郎は、丹羽家の若武士及び自分の門弟百人を連れて乗り出して来る、一番最後に練り出して来たのは、俠客唐大權兵衛、釣鐘彌左衛門、夢の市郎兵衛、揚巻助六の四人が、子分を三百人引連れ、同じ揃いの白装束の衣物に南無阿彌陀佛と染

め出したる文字の名號、白の襷に向鉢巻、面々長刀を落し差し、尻端折つて草鞋穿き、凛々しくも又勇ましく相見へた。彦「イヨ……、流石は喧嘩男だけあつて面白い扮装だ、御苦勞々々、併し太助は何うだ、一番先に來て居なければならぬ奴が、今日は遅いではないか……」四方を見廻して居る處へ、遙の方よりタツくと威勢よく驅けつけて來た一心太助、後に續いて神田魚河岸の若い者百五十人、何れも揃いの法被に紺の腹掛け四ツ井、本紺の股引シヤンと穿き、紺足袋に草鞋穿き、各自に六尺棒を抱い込み、豆紋りの手拭で向鉢巻キリ、と締め、身輕の扮装で歩つて來た。彦「ヤア太助遅いぞ……太助何うも遅くなりました、出陣の首途に一杯引掛けて居ましたので……最う之れで揃いましたのでせう。彦「オ、揃つた、サア出掛けやう」彦左衛門は嬉しくつて堪らない、馬に跨り、采配サツと打ち振ると、ガヤ／＼の話聲はヒタリと止み、ハラ／＼と正列する、天下三大音の一人大久保彦左衛門

門は馬上に延び上つて大音聲 彦之より出陣するのだ、途中見苦しい振舞するな、驛々の本陣へ着けば、酒は飲み次第、併し亂暴をする奴は、大久保彦左が槍玉に揚げるから左様思へツ、進めツ……」真先に大久保彦左衛門續いて柳生飛彈守、尾張の星野勘左衛門、紀州の關口八郎、水戸の朝比奈彌太郎丹羽家の關口彌太郎、其の後より瀬川伴五郎、荒木又右衛門、寺西閑心、石川岸柳、竹内加賀之助等の同勢三百人、其の後に續いて俠客連中、殿りが一心太助等の魚河岸連中だ、何んしろ總勢千二百人だから太したものだ、品川海岸をソロ／＼繰り出した、往來のものは屹驚して □「オヤ／＼、何んだらう、真先に馬に乗つて居られるのは、大久保のお殿様だが、終の方から俠客や魚河岸連中が行くぜ ○「オヤ／＼、一心太助の兄貴が大威張りて居るじやアねへか、此奴は何處かに喧嘩があるのじやアあるまいか 甲「冗談じやアねへ、喧嘩に行くのに、大久保様や柳生様が出掛ける氣遣いはねへ、何で

も掛合い事があつて出掛けると云ふ話だ 乙「掛合い事に、甲胃を着て出掛けるとは前代未聞だ、噂區々にいたして居る、突飛な事をやる事の好きな彦左衛門ではあるが、可笑しな事をしては、將軍家の威勢に關はるから、萬事柳生飛彈守に相談して、途中は成べく身を謹ませ、騒ぐ事の好きな俠客、魚河岸連中を嚴重に誡しめ、命に背くものは斬つて捨てる」と云ひ渡してあるから、誰一人亂暴な事をするものもない、正々堂々と何なく米澤の城下に乗入込み、夫々旅館を定めて宿を取つた、然るに早くも此の事が上杉家に聞へると、老臣直江山城守、宇佐美甲斐守は大いに驚き 甲「一体、之れは何うしたのであらう、大久保彦左衛門、柳生飛彈守等一千人の人數が乗り込んで來るとは奇体だ、千阪兵部の書面では、斯んな筈ではなかつたが……」と、直ちに登城をして、一家中の重立つものに總登城を命じた、大久保彦左衛門等の人數は一旦宿に着くと共に、夫々部署を定め、米澤城下の出入口を、彼處に二百人、此處

に三百人と犇々と取り固め、蟻の這いつる場處もないやうに、嚴重に警固しました。

●チト荒れるのも藥だ

翌朝になると大久保彦左衛門は、彦「サア、之から一番談判に出掛けやう、十五萬石を脊負つて歸るか、二人を受け取るか、二つに一つの大芝居だ」と、彦左衛門何處迄も芝居氣で居る、柳生飛彈守と兩人響を並べ、澁川伴五郎と荒木又右衛門を從へ、彦「伴五郎、又右衛門、乃公が目配せをしたら荒れ出せ、大抵夫れ迄には及ぶまいと思ふが、餘り強性であつたら、チト荒れるのも藥だ、件「承知いたしました、成べく早く目配せをして下さいまするやう」又「左様だ、チト何かない事には此處迄來た甲斐がない」と、二人は大喜び、何なく米澤城の大手門前に歩つて來た、澁川伴五郎大音張

り上げ、件「ヤア、談判の筋あつて大久保彦左衛門、柳生飛彈守兩人、江戸表より乗り込んだり、件「開門々々……」以前は門を打ち破らなければ開けなかつたが、今度は上杉家も怯々者だ、何なく表門を八文字に開く、彦「乗り打ち御免……」馬上のまゝ、奥へ通る、案内されて大廣間に來ると、幸い大評定最中であるから、大久保彦左衛門、柳生飛彈守は、別室に於いて、宇佐美甲斐守、直江山城守に對面、逐一出張の次第の述べる、兩人も兼ねて覺悟の前であるから、甲「何れ、追て御返答仕る……」と、四人を厚く響應して置き、大評定の場處へ引取つた、處が斯うなつては上杉家も仕方ない、愚圖々々云つたら、十五萬石に關はる一大事となるのだから、快よく兩人を引渡す事に協議は纏つた、處が肝心の直江刑部と熊谷權十郎は堪らない、矢張り評定の場處へ出て居たが、肝心の處になると、二人を別室に退かせ、引渡すと云ふ事に決着した、早くも二人は之れを知り、刑「權十郎、

我々引渡されては首がない事は受合だ、何うしたものであらう 權御家老
 此の上は密に城内を逃げ出させよう、夫より外に手段はござらぬ」二人はヒ
 ソソ話合つて居る、處が其の間置いて次の居間に居た澁川伴五郎は
 大久保彦左衛門が目配せると云つたが、何うやら夫れも的にならないから、
 プラ／＼廊下を歩きながら、四方の様子を窺つて居ると、横手の居間でヒソ
 話聲がする、伴五郎立ち止つて耳を傾けて居るとは知らず、内部では
 刑部と權十郎が、逃げ出す相談最中であるから 伴「フム、此奴等が父上
 を欺討にした奴だな、ヨシツ、逃してなるものか」突然障子蹴開き躍り込み、
 伴「ヤイツ曲者ツ、逃げやうとは卑怯な奴、澁川伴五郎是れにあり、騒ぐ
 なツ……」叫ぶと等しく猿臂を伸して兩人の首筋無手と掴んだ、刑部と權十
 郎は屹驚仰天、振り放して逃げんとする 伴「エ、イ、何をツ」左右に取つ
 て投げ出した、窮鼠却つて猫を噛む、二人も絶体絶命の場合となつたから、

ズラリ／＼と小刀抜き放し、右と左より伴五郎に突つかゝる、伴五郎ヒラリ
 くと体を躲し、手捕りにせんと争つて居る、此の物音を聞きつけた荒木又
 右衛門、ノシ／＼来て見ると此の有様だから 又「オヤツ、澁川、一人で巧い
 事をやつて居るな、乃公が一人を引受けた、突然權十郎の背後より、襟頭取
 つて、ドスン何なく押へつける、刑部は死物狂に、盲滅法に斬りかゝつ
 て来る奴を、之れも短刀叩き落して、苦もなく取つて押へる、處へ上杉家
 の家來も、騒を聞きつけ駆けつける、一旦兩人は上杉家に引渡し、別室に
 於いて待ち受けて居ると、暫らくして刑部と權十郎は繩付となつて引出され、
 正式に大久保、柳生の手へ引渡す 彦「ヤア、大きに有難い、兩人さへ受取れ
 ば、夫れで宜いと云ふ譯には行かぬ、未だ文句はあるのだが、夫れは後廻しと
 して、二人の奴は確に受取つた、併し念の爲に申して置くが、之れは贖者で
 はあるまいな、大久保彦左衛門と柳生飛彈守を欺くと云ふと、十五萬石は無

事では濟まん、謙信公以来の名家も斷絶の不幸を運れない、其の分承知に及ばれたい彦左衛門威文句を殘して兩人を引立て、旅館へ引取る何處迄も抜目のない彦左衛門、後で金をドツサリ捲き上げる積りで下駄を預けて置いたのだ果して其の夜宇佐美甲斐守は密に大久保彦左衛門を旅館に訪ね、主家取成しの義を願つた上、持たせて來た千兩箱を五ツ目の前に積み重ねた彦「イヨ一五千兩とはチヨイと大きい、嫌味一つで大した儲けだ……」心の中には思つて居ても、苦り切つて面真目な顔彦「何うも怪しからん、彦左衛門到つて正直潔白の男だ、賄賂などは大嫌いだ、折角だがお斷り申す……と云ひたいが、突つ返して蹴撒く事も氣の毒、シヤア預かつて置く失禮だが持つて歸るは面倒、江戸の駿河臺迄送つて貰いたい、横着な事を云つて居る。

● 譽は高し飛鳥山

おほくばい彦左衛門は、一同は刑部權十郎の兩名を警固して江戸表へ引揚げる、俠客組と魚河岸組には、千兩箱一つ宛を興へて引取らせ、後の三千兩は彦左衛門が取り込んで仕舞つた、彦左衛門は將軍家に願を上げた上、來る二十七日飛鳥山に於いて仇討と云ふ事になる、何んしろ前代未聞の仇討、將軍家上覽と云ふので、江戸八百八町は大人氣、大評判、彦左衛門三千兩は取り込んだが、決して自分の私用には一文も使はない、仇討の準備、其の他の費用に、ドン／＼掴み出す、イヨ／＼二十七日仇討の當日になると彦左衛門は俠客組と魚河岸の若い奴に命じて、四斗樽を買い込み、ドシ／＼飛鳥山に運び込ませる、群集がドヤ／＼繰り出して來るを待つて、一心太助は悉く四斗樽の鏡を抜かせ、太サア皆飲んでくれ、今日は遊川蟠龍軒先生の大仇討だ、供養の爲め酒を振舞ふ、施餓鬼と云つちやア變な塩梅だが、飲み次第々々……何んしろ人間は慾の固り、ロハで飲めると云ふのだから大喜び、中にはソロ

「瓢箪を持つて来て詰め込む奴もある。太「オイ、左様な慾張つた事をしちやア不可んよ……」正面、棧敷には三代將軍家光公悠然として着座其の左右には旗本連中ズラリと居列ぶ、紀州家の名代關口八郎、水戸家の名代朝比奈彌太郎、尾州の名代星野勘左衛門、丹羽家の名代關口彌太郎等は右手の棧敷に陣取る、左りの棧敷は、江戸三十六道場の武術家が、ギシリ詰めて居る、矢來の内部には俠客連中が要處々々を固めて居る、一心太助は魚河岸の若者を指圖して、群集に酒を飲ませ、騷動を取り締る、廳で場内へは、双方より現はれる、澁川伴五郎は白木綿の襷袢巻、袴の股立高く取り、無刀の姿で進み出る、直江刑部と熊谷權十郎は、各々身仕度して立ち出で、式作法型の如くあつて、打ち出す太鼓を相圖に東西に別れ身構へる、此の時、澁川伴五郎は「サア、直江刑部、熊谷權十郎承はれ、昨年今月今日、汝等卑怯にも、我が父蟠龍軒を欺討ちいたしたる、覺へあらう、

父の仇は俱に天を戴かず、イザ尋常に勝負せよッ 刑「黙れ此奴、蟠龍軒は頑固一徹の没常識であるから、此の刑部が熊谷權十郎に命じて討ち取らせただのである、汝も共に冥途の道伴れにいたしてくれから覺悟しろッ」突然一刀抜き放し、左右より斬つてかゝる、伴五郎は根が柔術家であるから、刀などは持たない、ヒラリヒラリと軀を躡し、前に現はれ後ろに隠れ、頼りに二人を惱まして居たが、今しもサツと刑部に飛びかゝると見る間に、横面パシオン大力無双の伴五郎に殴られ、刑部はヨロ／＼と踉蹌く、權十郎夫れと見て横合より斬りかゝる、引外して腕首掴み、肩に擔いで岩石落とし、ドシン 伴「サア何うだ、今に貴様等の素首は引抜いてくれる、確り來い、二人と一人だ最少しシヤンとしろ、水でも飲めッ……」休息させては立ち合ひ、二人をへト／＼に弱らせて置いて、突然刑部に躍りかゝり、首筋掴んで引倒し、肩口を足で踏みつけたと思ふと、力に任せて、ウーン首はムク／＼と引抜けた、之



れを見た權十郎は青くなり、狂氣の如く斬つてかゝる奴を、引捕へて捨じ倒し
 同じくウーン、ムク／＼と首は抜けた、數萬の群集はワア／＼と囃し立てる、
 大久保彦左衛門は扇を開き、彦伴五郎天晴々々、前代未聞の仇討だ、絶息
 を刺す、暇がなくなつて宜い、出來した／＼と、躍り上つて賞め立てる、其の
 怪力には將軍家も驚き給い、將澁川伴五郎と云へるものは、強力無双の
 勇士である、天下恐らく敵するものはあるまい」と、賞美の詞を下さる、澁
 川伴五郎は身に餘る光榮と、有難涙に暮れる、仇討は首尾よく終つた、澁川
 流柔術の開祖澁川伴五郎の名は、飛鳥山と共に、天下に轟き渉つた。

通した澁川伴五郎は、實に武士道の典型として耻ない人物である。



怪傑 澁川伴五郎 終

— 目 録 —

9	8	7	6	5	4	3	2	1	***
水戸 黃門	九州 御陣	曾田 新左衛門	天下 豪傑	天下 之豪傑	矢代 騷動	乃木 大將	美術 の譽	一 休禪師	***
東國北國漫遊記	豐公御前相撲	茶室落語	大試合	大久保	譽の大久保	言行錄	左甚五郎	師全一册	***
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	***
18	17	16	15	14	13	12	11	10	***
探偵 實話	忠勇 木村	春日 野若	軍神 橋中	軍偵 山岡	不思議 怪談	水戸 九州	水戸 中國	水戸 東海道	***
淵上義政	長門守	若子	佐	勝子	百物語	漫遊記	漫遊記	漫遊記	***
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	***

大正文庫

袖珍形總布製 正價各廿五錢
金文字頗美 郵送料金四錢
製本攜帶至便

發行所 駿々堂書店

大正三年七月二十日印刷
大正三年七月廿五日發行



著者兼發行所 大淵浪

印刷者 吉村源次郎

印刷所 山田元吉

大阪府南區末吉橋通四丁目八十六番邸

發行所

大阪府南區末吉橋通四丁目八十六番邸
電話長南千〇〇七番
振替大阪千〇卅五番

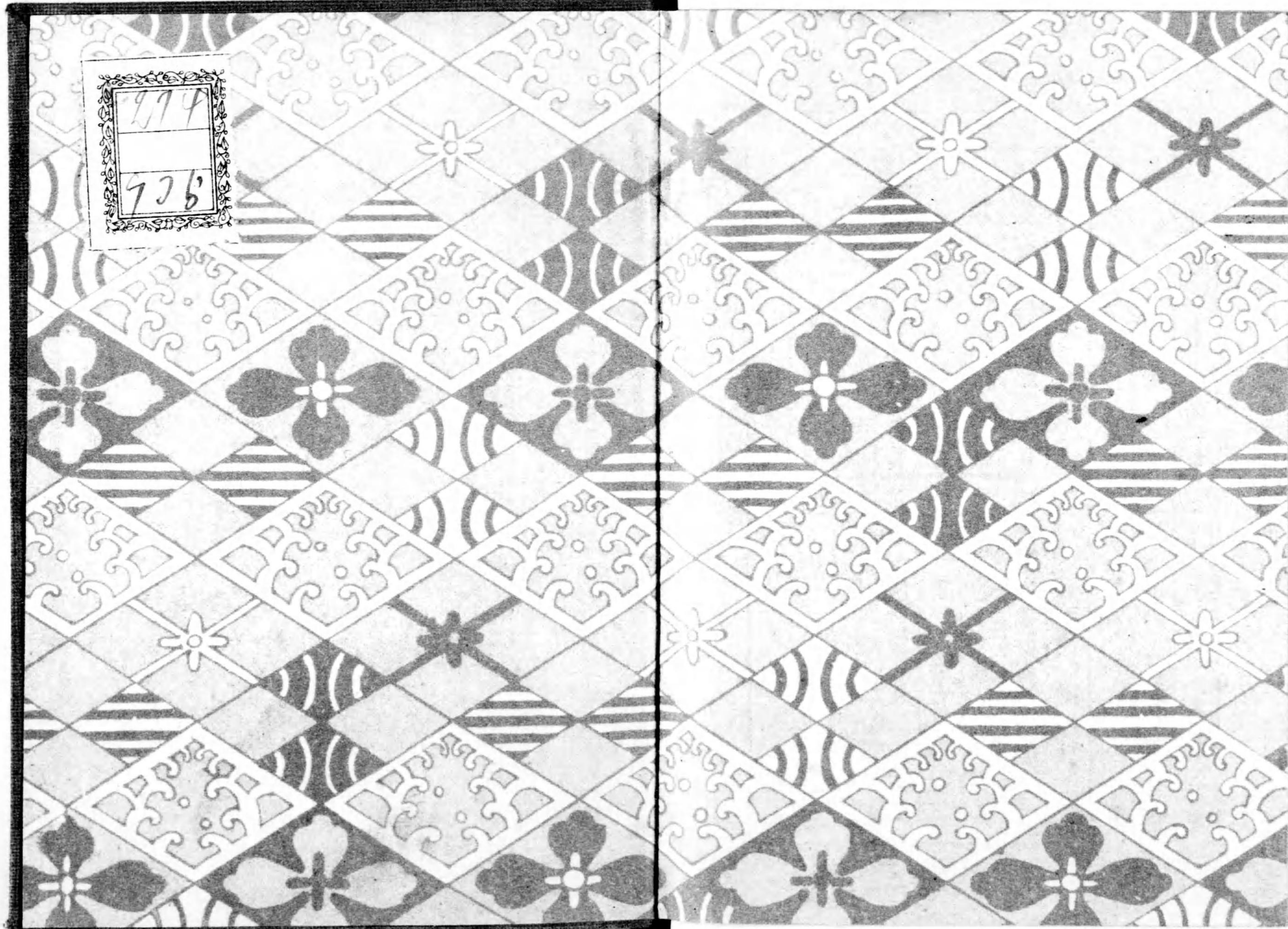
大正文庫
澁川伴五郎

29

— ← 録 目 → —

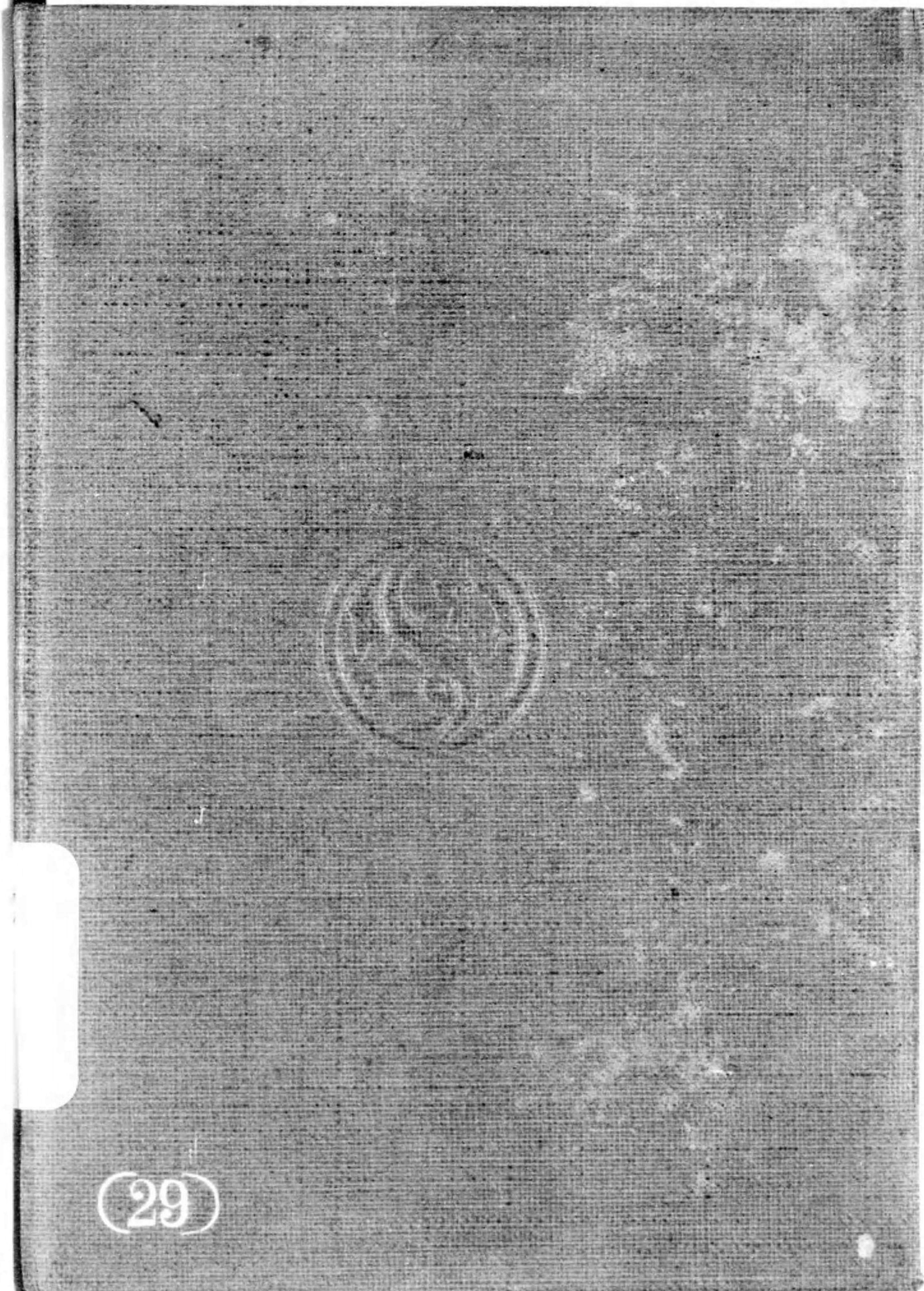
29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
澁川伴五郎	妖怪退治 塙の太郎	怪傑村越三十郎	廿五ヶ所道場破り 有馬源之助	豪傑犬川莊助	佐賀怪猫退治	俠婦玉川お芳	豪傑磯畑伴藏	豪傑犬塚信乃	無言の誓	二人むすめ
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
宮本武藏旅日記	豪傑犬田小文吾	戸田新八郎	松山狸退治	難波夏合戦	難波冬合戦	難波戰記	冒險小説 蠻勇飛行	豪傑犬飼現八	豪傑紀州竹若丸	變カ王 北村一舟齋
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册

駿々堂書店發行



974
926

終



29